

(続紙 1)

京都大学	博士（農学）	氏名	坂梨 健太
論文題目	中部熱帯アフリカにおける小規模農民の農業と森林資源利用に関する研究 —カメルーン南部のカカオ生産地域を事例として—		
(論文内容の要旨)			
本論文は、中部熱帯アフリカのカメルーン南部における小規模農民のカカオ生産農業について、長期間の実態調査に基づき、農業生産と採集狩猟活動の結びつきを明らかにし、小規模農民の農業生産が生物資源の保全や世界経済とどのように結びついていくかを明らかにしたものである。カメルーン南部のカカオ生産は、大規模プランテーションではなく、小規模の家族農業経営によって農業生産が行なわれている。カメルーンは、アフリカで4番目、世界で5番目のカカオ生産国であるが、同じ西アフリカのコート・ジボワールと比較すると、コート・ジボワールが1960年代の8倍の生産量に増加したのに対し、カメルーンは約2倍に増加したにすぎない。 第1章では、熱帯アフリカ農業と農民研究に関する方法論的検討が行なわれた。21世紀に入ってアフリカにおいては、自然保護を組み込んだ第二の構造調整ともいべき経済変動が進行しつつある。本論では、最初に、農業経済研究におけるアフリカの食料生産の研究とその展開を、次いで生態人類学研究における自然と生業に関する研究の検討が行なわれ、最後に世界のペザント研究と換金作物としてのカカオ生産に関する研究についての検討が行なわれ、本論文の研究上の位置づけが行なわれた。 第2章では、本論の調査地となっているカメルーン南部のジャー川周辺地域の特徴が明らかにされた。この地域はカメルーンの主要なカカオ生産地帯であると同時に、生物多様性を保全している自然林として、ユネスコによって世界自然遺産に認定されている。調査対象となったジャー川周辺に住む農耕民Fangの人々は、国際市場と直接結びついたカカオの農業生産を行なうと同時に、このような豊かな森林のさまざまな動植物資源を利用して生活を維持しているところに特色を持つ。 第3章では、Fangの行なう農業と狩猟採集活動の関係が分析された。Fangの農業では、カカオ畑を造成し、カカオ生産を中心とした農業を営むと同時に、キャッサバ、プランテンバナナ、トウモロコシ等の主食作物を焼畑で栽培している。また農業だけでなく、狩猟採集活動も積極的に行なっている。これまでのアフリカ農業研究では、主食の作物生産に関する生業研究が中心であった。また、狩猟採集活動は、定着し農業が拡大することによって、徐々に縮小すると考えられてきた。しかし、Fangの農業では、カカオの収穫期に必要な労働力を確保するために、むしろ狩猟活動は活発化し、捕獲される動物や採集されるヤシ酒の量は増大していることが明らかになった。狩猟活動は商品作物であるカカオ生産活動と密接に関連し、むしろそれを支えていることが明らかにされた。 第4章では、Fangの農業における労働力利用が分析された。親族間の労働供与、労働交換、grouperと呼ばれる労働召集、契約労働（ここには現金だけでなく、物の供与や農作物の供与も含む）の4形態の存在が明らかにされ、農作業との関係が分析さ			

れた。焼畑農業とカカオ生産では、さまざまな労働力利用の形態があること、Fangの人々の労働力を利用する場合と隣接する狩猟採集民Bakaの労働力を利用する場合とでは、労働力利用の形態が異なること等が明らかにされた。特に、カカオ収穫期における労働力不足はBakaの労働力によって補われており、このためには、現金だけではなく、肉、農作物、酒、薬が必要不可欠とされ、日常的な社会的関係を維持するために頻繁に贈与・交換が行なわれていることが明らかにされた。また、生業活動が異なる民族間での、労働力利用の結びつきが明らかにされた。

第5章では、Fangの農業における土地利用の分析が行なわれた。Fangの土地利用では、農耕地としての焼畑、カカオ畑と、狩猟採集地域としての二次林とが組み合わされ利用されていることが明らかにされた。主食作物用の焼畑の多くは、カカオ畑に移行し、カカオ畑の周囲の二次林ははね罾猟や銃猟の領域として利用されている。Fangの人々は、農業だけでなく狩猟や採集活動による森林利用を並行して行っており、農耕地としての土地利用だけでは、経済活動は完結しないことが明らかにされた。

第6章では本論文の結論が要約されており、第一に、Fangによるカカオ生産が主食用焼畑農業および狩猟採集活動と密接に結びついていること、第二に、農耕民と狩猟採集民との関係は、労働力利用により緊密に結びついており、労働は現金以外にも作物や肉、酒、薬などの物の贈与を伴う相補的な社会的関係によって構築され維持されていること、第三に、GPSを用いたFangの土地利用実態の調査から、農耕地と狩猟採集地とが必ずしも分離しておらず、Fangは両者を一体としてとらえてそれに基づいた森林空間利用を行っており、生活圏も一体となったものが形成されていることが論じられた。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入する場合は、400～1,100 wordsで作成し
審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、熱帯アフリカ・カメルーンの豊かな熱帯雨林地帯に住む農耕民Fangの農業と自然資源利用、労働力利用、土地利用、経済活動に関して、実態調査に基づき、商品作物生産であるカカオ農業と狩猟採集活動を含む他の生業活動とが密接に結びついていることを実証した研究である。

理論的には、農業が拡大すれば必ず狩猟採集活動が縮小するという一般的な前提を覆し、狩猟採集活動と結びついて活性化する農業のあり方を示した。さらに国際市場と結びついたカカオ生産が、熱帯アフリカでは市場経済だけでなく他の生業活動と密接に結びつき、相互依存関係にあることを実証し、熱帯雨林地帯における資源利用と森林保護について新たな視点を提供した。評価できる点は、以下の三点である。

第一は、熱帯アフリカの森林地帯に住むFangの農耕活動のうち国際的換金作物であるカカオ生産が、主食用食料生産の焼畑農業だけではなく、森林資源を利用した狩猟活動や採集活動とも密接に結びついていることを明らかにしたこと。

第二は、カカオ生産の労働力利用において、Fangは同じ民族の労働力だけでなく隣接するBakaの労働力にも依存しており、そのためには現金だけではなく、食料・医薬品・肉等を用いた贈与・交換を継続的に行ない、社会的関係が構築・維持されていることを明らかにした。これらの過程を通じてFangは農耕民、Bakaは狩猟採集民と生業によって民族を区分することが、実態に合わなくなっていることを明らかにした。

第三は、熱帯アフリカの森林地帯に住む農耕民の森林空間利用は、いわゆる農耕地だけに限定されているのではなく、周辺の森林を含みこんで構成されていることを明らかにした。こうした視点は、現在行なわれている森林保護政策には含まれていない新しい視点である。

以上のように、本論文は生物資源経済学および経済人類学の方法と生態人類学の方法に基づき、カメルーンのカカオ生産農業において、狩猟採集と結びついた商品作物生産の実態を明らかにし、農業とマイナー・サブシステムとの新たな関係を理論化したことにより、農学原論、生物資源経済学、経済人類学、生態人類学に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。
なお、平成24年11月15日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。

注) Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公開可能とする日付を記入すること。
要旨公開可能日： 年 月 日以降